

『法哲学と法哲学の対話』

(A.K.・30代・法曹)

昔、井上達夫先生の法哲学の講義をとっていたことから、元々法哲学に関心はあり、井上先生の弟子二人の対論ということで本書に興味を持った。

本書はタイトルどおり、著者二人の対話、これに対する第三者のコメント、これに対するリプライ、末尾に対話の設問協力者の観戦記と、重層的な対話で成り立っている。メインの対話は、読んでいてヒヤっとするくらいの痛烈な批判が炸裂しあい、まさに斬り合いといった様相。テーマは6本で、随処で実定法学の地盤＝法律家としての常識を揺るがせられる。例えば、個人もまた団体であり団体しか存在しない、未遂犯処罰を基礎付けるためには新派理論へのコミットが必要、事情判決の法理を正当化するためには憲法と公職選挙法が同等とみる見解もあり得るなど。法哲学に絡む用語は簡単に飲み込めるものではなかったが、自分の当たり前を崩される心細さと楽しさを堪能できた。二人の理路を追う中で文意が執筆者の思惑どおりに受け取られていない場面が多々あり、自分の考えを文章で人に伝えること、人の考えを正確に読み取ることの難しさを感じた。最後の観戦記は特に有益と思われ、著者二人について予備知識がない人は観戦記から読むと理解しやすいと思う。

『法学教室』2017年9月号(No.444)掲載「Reader's Voice」より